

特集：地域の精神保健福祉活動はどのように展開するか

神戸の事件，中学生のナイフの問題から見た 児童思春期のメンタルヘルスにおける予測の問題

高塚 雄 介

The subject of forecast for mental health in a childhood and adolescence —From a few comments on the case of Kobe & the case of knife in a junior high-school students—

Yusuke TAKATSUKA

はじめに

神戸の中学生による連続児童殺傷事件から早くも一年余りが経過した。当初この事件の仕業の異様さに驚かされたとともに、その犯行が14歳の少年によりもたらされたことに多くの人々はショックを覚えた。マスコミ等に登場した識者の多くはまず、日本の教育環境や家庭環境の歪みがこのような事件を生んだと指摘した。さらに、日本社会にもアメリカ社会に見られる少年の凶悪犯罪の蔓延と似た状況が次第に増えつつあると警告するものも少なくなかった。こうした見解はわが国における「少年法」がもはや時代にそぐわなくなってきたと、早急に改正すべきであるとの論調とも重なり、少年に対する罰則強化の動きを作り出している。その一方で、少年の供述内容等が次第に明らかにされるにつれ（あくまでも、マスコミ等を介してではあるが）、精神医学の専門家たちから上がってきたのは、少年の有する内的世界の特異性を精神病理の問題としてとらえ、これを極めて特殊なレア・ケース（Rare Case）として見るべきであるとの声であった。そしてこの事件をもって、わが国の教育や社会状況を云々するのはナンセンスであるとも強調した。そうした見解を、専門家が口にすればするほど、一般の人々は「そうかあれは特殊なケースであって心配する必要はないのだ」と思い、次第にブラウン管の向こうにある、現実的ではない出来事程度にしか意識しないようになっていったようである。もし民心の動揺を鎮静化させるという深謀遠略的な配慮がそこに潜んでいるとするならば、これらの専門家たちの論調はみごとに心理的な操作を果たしたと言うことが出来る。確かに、当初見られたような、「ウチの子もあのようなことをしでかすのではないか」といった、短絡的な発想を戒め、社会不安を増長させるような風潮に楔を打ったことはそれなりの意味があったと考

えられる。経済世界における大恐慌の始まりのように、憶測が憶測を呼び、流言飛語が社会的な不安をかりたてるような事態は安定した市民生活にとってけして好ましいことではない。マスコミ主導型の不安醸成的な風潮にくぎをさしたという点についてだけ見るならば、筆者もそれなりの共感を感じる。しかしながら、そのこととこの事件が社会に投げかけた問題の大きさは、その後あいつぐ中学生たちのナイフによる事件の重みと重ね合わせる時、けしてレア・ケースなどと言って済ませることの出来ない重要な課題を私たちに突きつけていることは間違いない。その辺の認識や対応を示さずに、単に医学的な所見を示すだけで事をすませようとするのは、少なくとも精神保健というものに関心を持つ立場からは看過する事は出来ない。

精神保健の課題とは何か

筆者は常日頃精神保健の課題というのは、いつの時代にあってもその時代の風潮であるとか、その時代の持つ建前からはみ出した世界、もしくは建前に乗れなかった人々に多く顕在化しやすいとの認識を持っている。そのような視点を持って見るならば、精神保健という点から注目しケアをしなければならぬのは、時代の潮流からはみ出してしまったり、取り残されてしまいがちな人々であって、それはしばしばその時代の建前に忠実な立場からすると、レア・ケースとして軽視ないしは無視されてしまうことが少なくないと思っている。

言うまでもなく日本社会においては、この半世紀の間に、建前が大きく変化しつつある。そのため、建前からはみ出す人というのも以前のそれとは大きく変わってきている。例えば、抑圧のメカニズムが強ければ強いほど精神的な不安定状況がもたらされやすいことは、精神分析の立場になくとも理解されることである。だが、それが顕在化する対象というのは、時代とともに変化してくる。男性が優位な立場に置かれた封建社会においては、専ら抑圧を強いられ

てきたのは女性の側であったと言えるだろう。建前としては、女性が男性に従うことであるとか、嫁いだ家の家風に従うことを課してきたからである。しかし、男女平等の考え方が一般化しつつある現代社会においては、抑圧はむしろ男性の方に強くなっているのではないかと感じさせられるケースが少なくない。自立や主体性というものが、建前として課せられているからである。このように、人間の集団においては、関係性のもとに一方の精神的満足感や安定度が高くなると、他方が不安定化するというようにシーソーゲームのような問題が常につきまといやすい。その時、不安定化する側をどのようにして支えていくか、ということに関心を払うのが精神保健の問題であるとも言える。時代に取り残されたにせよ、逆に時代に先んじているにせよ、いずれにしても社会的状況や文化的背景、価値意識との関連においてどのような心の歪みが生じているかを見ていかなければ、その時々々の精神保健の課題とは何であるのかを論ずることは、非常に難しいと考えられる。個人の精神病理だけに着目していたのでは、精神科的な治療行動としては意味があるのかもしれないが、精神保健とりわけ福祉との関連を考慮しようとする今日的な課題とはほど遠いものとなっていくと思われる。

最近の青少年の意識傾向と精神保健的な課題

さて、その様な認識のもとに、最近頻発している中学生を中心とする問題行動を見ていくと、明らかに起こるべくして起きたという感じがしてならない。ただし、起こるべくしてといても、マスコミが好む「学校が悪い」「親が悪い」あげくのはては「政治家をはじめとする大人社会の倫理規範の乏しさが原因」などといった皮相な見解に組みするつもりはさらさらない。なぜならば、現代社会においては子供を育てる環境の変化がもたらすマイナス状況というものが、複合汚染のように存在していると言わざるをえないからである。特定の原因によってもたらされる問題ではないと考えられる。しかも、それらの環境変化そのものは、どちらかというプラス状況としての評価が高いものである。プラス評価というものに傾注し埋没してしまうと、そこに潜む落とし穴にはなかなか気がつかないということになってしまう。その一例として、筆者は最近の子どもたちがしばしば口にする「関係ない」という言葉に注目している。あらゆる事象であるとか他人との関わりを「切る」言葉としてこの「関係ない」が用いられるのだが、その言葉の正当性の根拠として彼らは、「自分は自分、他人は他人」なんだからと言う。学校で先生がそう教えたじゃないかと聞き直して見せる。確かに最近の大人達は親も教師もその言葉を好んで使っている場合が少なくない。子ども同士のトラブルを収める時にもしばしば使われる言葉でもある。しかし大人たちが、自立して生きることの支えとなり、異質な人間とも共生することが大切であることの裏付けとして導こうとしたその言葉が、子ども達の心の中では、どうも違った意味で定着してきているように思われる。他人との繋がりを作る言葉としてではなく、関係を切る言葉とし

て意味づけられているようである。体験的な裏付けのないまま、言葉だけの刷り込みが行われる結果もたらされる、歪みの一例であると言える。現代社会において、子どもの心の発達を歪めていくと考えられる背景要因を幾つか指摘しておきたい。

環境の変化	子育てに対する影響
(1) 家族状況の変化が引き起こす絶対的教育量の減少と親・教育の外部委託化	自律性が育てられない
(2) 地域社会の変容と異(多)文化状況の拡大	人間関係における摩擦をどのように処理していいかわからない
(3) ボーダレス社会に潜むモデル性の喪失状態	準拠枠が作れないため行動の基準がわからない
(4) 家庭・学校・社会にあふれる競争原理の重視	優勝劣敗へのこだわり強化
(5) 自立(主体性)への過剰期待	自己決定に対する不安の増大と自己完結性の強化

以上の事を少し補足的に説明すると次のようになる。

まず(1)に関して言うならば、現代の家族構造と状況の変化からもたらされる問題がある。核家族化と少子化が進行する中で、一般的には親子の関係が蜜になり過ぎており、その結果、過保護に育てられる子供が増えている事が指摘されている。確かに甘やかされる子供が目立つことは否めない。その一方で親から子供に対して行われる教育機能がどんどん減少しているということに注目せざるをえない。その結果、育つ過程に必要な体験や援助というものが十分に講じられていない子どもたちが増えていることも事実である。筆者は、今の子どもたちが真に保護的な環境のもとに育てられているとは言い難いと思っている。例えば、子どもが登校する前に既に親の姿は家から消え、わが子がどういう状態で学校に出かけていくか知らない親が増えてきている。子どもが帰宅してもそこには親の姿はないという家庭もそう珍しくない。ということは、子どもが学校でどのような事態に遭遇して、そこに生じた喜怒哀楽の世界を引っさげて帰宅する、その時の様子を親はつかんでいないということになる。ほんの少し前までは、「ただいま」という子どもの声の表情から親は「学校で何かあったな」と瞬時に判断し、全神経を集中させて子どもと関わろうとした。親でなくとも家族の中にいる大人の誰かや、隣近所の大人たちがその役割を果たしていた。そうしたことが出来た時代とは明らかに違う。子どもが帰宅してから数時間のタイム・ラグを経た後に親が帰宅して「今日どうだった」と子どもに尋ねたとしても、子どもはすでに平常の表情に戻って「別に」としか応えないから、結局親は何もわからないということになる。子どもに自立した生活をおくらせることをはやくから体験させることになるから、悪いことではないのではという意見もあろう。しかし、自立のため

にはしっかりとした自律感覚を身につけさせておくことが前提となる。とりわけ、不安や寂しさというものをどのように処理していけるかという事が重要である。はたして、そうしたステップを踏んだ上での動きになっているかどうかという点が問題である。子どもたちに対する保護的な機能を補う中間施設として、学童保育施設が多くの地域に作られてはいるが、親の替わりが務まるだけの豊かな感受性を持ち、自律性を身につけさせることの出来る指導者を配置しているところは残念ながら少ない。危険を避けるための管理者としての役割を担っているだけの場合が少なくない。同様のことは別なところにも現れている。少子化に伴う社会性の不足を補うことを目的として、子どもたちを幼少時から様々なスポーツクラブなどの活動に参加させようとする親が増えている。集団に参加させることの効果を否定はしない。しかし、本当にそこで社会性を獲得出来るのかということになると疑問である。社会性というのは、ただ人の中において周囲の人間と一緒に行動していくことで培われるものではない。自己の内部に生じた複数の、しかも時として矛盾する様々な欲望の中で何を優先させたいのかを明確にしたり、他者との交流の中に生じた摩擦や確執といったものに伴う様々な葛藤を乗り越えるといった体験を通して次第に確立されていくものであろう。そのためには自己の内面と充分に向き合う時間的な余裕が保証されることと、その過程で内面に生ずる様々なつらさを、しっかりと受け止め支えてくれる人が存在することが大切になる。しかし、多くの習い事や運動などのクラブは、課題達成的に動くことが優先され、それを遂行するための約束や決まりが、外枠としてまず刷り込まれていく。その道のエキスパートとしての指導者はいても、豊かな感受性を持って子どもの内面を磨いてくれるような指導者が配置されているとは限らない。しかも複数の集団を時間によりかけ持ちさせられる子どもも多く、そこまでの関わりを持ちたくても持てないという状況もある。その結果、自分の内面に生ずる葛藤を処理する能力を身につけるのではなく、ただひたすら要求される課題を、弱音を見せずに頑張っただけで達成しようとする子どもが、所属集団においては重視されることになる。そのような子どもほど指導者からも親からも、良い子として評価されていくことになる。子どもは誉められれば嬉しいから黙ってそれに従う。しかし、内面に生じた葛藤を処理する能力を育てられてはいない、つまり自律性が貯えられていないのだから、壁にぶつかった時は簡単に挫折してしまうことになる。高校生や大学生に目立つアパシー現象を見せる若者たちにもそうした傾向がある。

(2)について見るならば、今日の日本社会はきわめて多様な文化の複合する社会になってきていると考えられる。この半世紀の間に、わが国は価値の多様化という言葉に抵抗なく受け入れてきた。だが、価値観の背後には紛れもなくそこに生きる人々が長い年月をかけて培ってきた文化の違いが存在している。例えば、コミュニケーションの仕方というのは文化によりかなり異なるものであることが知られている。内的世界に起こる様々な感情や思いというものを

出来るだけ言語化し、周囲の人間に伝えることを重視する価値観と、その反対に内的世界にあるものを出来るだけ内面にとどめておくことを重視する価値観とがあり、それぞれの価値意識に基づく表現の仕方や、他者との関わり合い方には大きな違いがある。前者は一人一人の違いがあることを当然とし、その違いを明確にすることでお互いに共存出来る社会を作ろうとする。そのような社会ではアサーティブ（自己表現が豊か）な人間やディベートを好む人間が評価される。後者は、違いを明確にすることで気まずい思いをしたり、相手を傷つけてしまうことがあると考えるからそれを避けることで共存を図ろうとする。この場合は言語化しない分、こちらの思いを周囲の人間が察してくれることを期待する。土居健郎氏の説く「甘え」に通じる世界がそこにはある。価値観のレベルでとらえるならば、どちらが良くてどちらが悪いということになってしまうのだろうが、文化として見るならばそう簡単に、どちらが良くてどちらが悪いとか言うことは出来なくなる。さらに難しいのは、こうした考え方の違いが作り出す自我モデルが異なるということである。内なる世界にあるものを外に向かって吐き出すことを「強い自我」として評価する社会と、内なる世界にとどめておけることを「強い自我」とみなす社会の違いがそこにある。従来の日本社会における自我モデルは後者であった。だからこそ、日本人好みの強い自我の持ち主としては、忠臣蔵の大石内蔵助のような人物像が描かれるということになるのだろう。それに対して、欧米社会における自我モデルは明らかに前者に属するものである。しかし、日本社会においても最近では前者の方を好む人々が増えてきていることは間違いない。その傾向は都市社会に住む人や知識水準の高い人ほど高くなっていると思われる。グローバルな視点に立つならば、それは当然の流れであると考えられる。だが、その背景には文化性があることを考えるとそれはそう簡単ではない。大人社会にあっては、互いに異なる相手の動きを、未熟の現れもしくは子どもっぽいものと見なして批判することになる。だが、子ども社会においてはそれはお互いに受け入れがたいものとして喧嘩の種になっていく。今の日本社会において、どのような自我を育むかは親や教師の好む方向に委ねられている。その結果子どもたちは自分の周囲の大人たちが好む自我を育まれ、それを絶対視する方向に強化される。やがて、自分とは異なる自我構造を身につけた相手の動きに反発するようになっていく。それが「いじめ」の構造の背景を作ることにもなっていく。かつての帰国子女問題に見られたように、子ども達の世界では文化戦争が起こりやすい。親や学校・教師たちがもう少し文化的な背景の違いによるものであると認識し、共存を図る指導をしない限り摩擦がエスカレートしていくことは妨げられないだろう。しかし、伝統的に生徒を同質化することを当然視してきた学校のあり方が壁となっている。

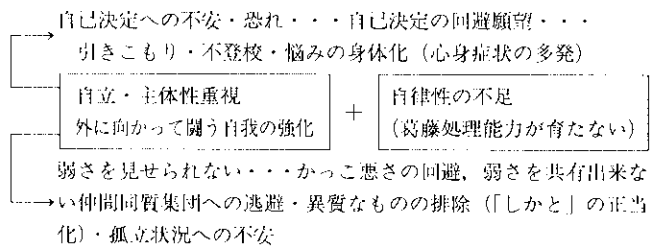
(3)は社会生活における枠組みが薄らぎ、ボーダレス化が進行するにつれ、今日の社会はあらゆる行為であるとか考え方が許容されるようになってきている。その結果、誰で

も自分の好む生き方を出来るようになり、自由に生きられるようになったことは間違いない。しかし、それが進めば進ほど何が良くて何が良くないかという基準を見つけ出せないまま、自分の行動基準がわからなくなっている若者たちが増えてきている。判断の基準が持てなければ、自己決定を重視する自立行動というものが難しくなっていく。

(4)については、今日の学校教育がもっとも批判される点である。受験目的の知識教育が重視され、偏差値によって進路が決められるというやり方が子どもたちにストレスを与え、コンプレックスを作り、いじめを生み出す遠因ともなっている。少なくとも義務教育がそのように行われていく中で、心を歪ませていく子どもたちが少なからず生まれていることは事実であろう。優勝劣敗にこだわり、ひたすら自分を勝利者としての栄光の座にかきたてようとする頑張りズムは、一端挫折すると立ち直る事が難しくなっていく。その結果引きこもり現象を起こし、自分を閉ざす動きが現れやすくなっている。

(5)に指摘した点は、(1)や(3)の問題とも重なる。今日の社会が求めるあるべき人間像というのは自立した人間であり、それは自己決定をすることが出来、主体性を持って行動することが出来る人間ということになる。家庭においても学校においても観念的にはそれを教育課題として重視している。しかし、それをどのようにして実現させようとするのかという具体的な面が見えにくい。ともかく自分で考え、判断し、その結果に対しての責任は自ら負わなければならないということを、早くから子ども達に強調して何とかやらせようとする。しかし、何度も繰り返すように、自立を可能にするためにはその前提として、自律性が高められておく必要がある。にもかかわらず、(1)で指摘したように、葛藤処理能力が貯えられずに自律性が育っていない若者が少なくない。自己決定をしたり、主体的に行動するには、まず判断基準というものを持たなくてはならないが、判断基準は天から降ってくるわけではない。様々な体験や試行錯誤を繰り返す中で形成されていくものである。自己の有する判断基準に対する信頼感がそこには生まれる。最初の段階それはまず、大人が示すモデルの模倣から始まることになるが、幼い内から何のモデルも示されないまま、ともかく自分で決めろと要求された子どもたちが多く、その結果、理由も根拠もないままにやみくもな判断をして行動し、あげくのはてはうまくいかないことで悶々としている子どもたちが目立ってきている。しかも、自分で決めろと言いつつ、結果に対しては厳しく批判したり責めたりする親や教師がこれまた少なくない。その結果、自分の判断に不安を覚え、次第に自己決定を必要とする場面から後退するようになっていく。新たな引きこもり現象がそこに登場する。さもないならば、自分で選んだことにどこまでも固執する「自己完結性」が強化された人間となっていく。他人の言うことには耳を傾けない頑なさがそこにはある。頼れる者は自分だけという感覚が肥大化するにつれ、他人との距離を保ってそれを縮めることには不安を覚えるようになっていく。距離を踏み越えて接近してこようとする人

間に対しては攻撃性だけが強まっていく。そんな子どもや若者たちが増えている。これを図示すると次のようになる。



うざったい・むかつく・切れるの世界

いつの時代にも子どもたちや若者が好んで使う言葉がある。最近最も使われる頻度が高く、今の子どもたちや若者たちの心の有り様を示す言葉として注目されるのは「うざったい」「むかつく」「切れる」という言葉であろう。男女を問わず、臨床場面でもよく出てくる言葉である。ことさらに強調するために「超」をつけることもしばしばである。「超うざったい奴」とか「超むかつく」といった具合である。「うざったい」という言葉の中にはうるさいとか面倒くさい、目障りといったニュアンスがこめられているが、相手を否定したり、相手との関わりを拒否する言葉として使われるようである。こちら側に主導権がある表現で、精神的には余裕がある場合に用いられる言葉のようである。この言葉が向けられる相手というのは、基本的な信頼関係が成立していないにも関わらず、相手が関わりを求めてこようとすることを察知した時に向けられていく事が多い。「むかつく」というのは、まさに胃がむかむかするような状態を示す身体表現であると言える。適切な言語表現が出来ない時に生ずる、心身症の状態を示す言葉であると考えるとわかりやすい。相手が自分の意に反することを言ったりしたりした場合や、自分のことを否定したり、批判したりする時に発せられることが多い。「うざったい」と異なり、こちらが受け身の状態に立たされた時に用いられる言葉でもある。守勢に立たされた分だけ、精神的にはかなり余裕が無くなった状態であると言える。この余裕が無くなった状態がさらに続くと、「切れる」ことになる。「切れる」時というのは、前駆症状として「頭の中が真っ白になる」という表現とつながっている。要は自分の自尊心が保てない状況に置かれた時に陥る心の状態と考えられる。全体的に今の若者たちは強い自尊感情を持っている。それは他人との比較や、今はやりのプラス思考によってもたらされたものではない。幼時的自己愛の世界がそのまま持ち越され、自己完結の世界に封じ込められたものでも言おうか。自分が良いと思っていることにケチをつけられることが我慢できないといった類のものである。この「うざったい気分」と「むかつく気分」そして「切れる状態」というものがつきまとう時、自らの主体性であるとか主導的立場が脅かされると感じ、それを何とかして振り払いたいと思う少年たちが、ナイフに手を出そうとすることが起こってくるように思える。この場合のナイフは攻撃のための道具ではなく、むしろ心理的な防衛の道具として意味づけられる。うざったい

奴に対して、そこからはみ出して「むかついたり」「切れる」状態に自分を陥らせないための道具であると言える。「それ以上言うなよ」、「言って自分をむかつかせるなよ」、「切れさせるなよ」という抑止効果への期待がこめられていると思われる。勿論、最近頻発する少年によるナイフ殺傷事件の全てがそうであるとは言えない。しかし、担任の女教師を刺殺した中学生や、いじめの仕返しをした友人を刺殺した中学生の心の動きを考えると、脅かされる自己の主体性を守ろうとする動きと見えなくもない。もし、そうであるとするならば、特に問題のある子どもだけがそうした行為に走るのではなく、ごく普通の子が、自らの主体性が脅かされると感じた時、心理的な防衛の役割を果たす道具としてナイフを隠し持つことは容易に予測出来る。

心理的な防衛が出来ない子どもたち

心の健康を維持するためには、逃げ場の存在が重要な鍵となることが少なくない。今の子どもたちにとっては、学校内にある保健室というのが逃げ場となっている。しかし、逃げ場というのはそのような物理的な場だけをさすものではないはずである。心の中で夢を描いたり、好きなことに熱中して気を紛らわせるというのも逃げ場を持つことになる。だがそういうことが出来ない子どもたちは、とにかく物理的な空間に逃げ込むことでしか、心を癒すことが出来ない。そして、物理的な空間に逃げることでしか逃げ場を保てない子というのは、その空間を離れた瞬間から心のバランスを崩すことになる。そう考えると、不登校になって家の中にいる子どもというのは、完全な逃げ場を確保したことになるのだろう。不登校にはならず、保健室に唯一の逃げ場を作ろうとする子どもたちは、一歩保健室を離れた時から不安につきまといられることになる。そうした子どもたちの中に、その時のために心理的な防衛のための道具を手に入れようとする者が出て来たとしても不思議はない。あたかもお守りを持つようなものである。ナイフにはその期待を抱かせるだけの魅力がある。まして、バタフライ・ナイフのように、持つことの格好良さが期待出来るものは一層魅力あるものとなる。主体的に保健室を逃げ場として利用しようとする子ほど、そのような防衛手段を考えるのかもしれない。その意味では、いじめられた子が最後に死を選ぶことにも重なる心的世界であると言えよう。いじめられることを厭がり、登校拒否になってしまう子はま

ず死ぬことはない。何とか頑張ってやっ払いこうとする子が、頑張ることに疲れた時、死を選んでしまうことになる。外に向かって頑張ろうとするエネルギーの備給が出来なくなったと感じた時に「切れてしまう」ことになり、残されたエネルギー（それは攻撃性に置き換えられる）が内側に向けられると自殺行動になる。もしもそのとき外に向かえば他殺行動になっていくことになる。例えいじめられていなくとも、幼見的な自己愛の世界を自己完結的に抱えている者にとっては、自分を脅かす「むかつく」存在が登場すると不安になってくる。必死になって突っ張って見せようとするが、それだけでは心許なくなった時、何らかの防衛の道具を身近に持とうとする。頭の中を真っ白にさせられ「切れた」と感じた瞬間、それは相手を黙らせる道具となり、そのことによって自尊心は守られることになる。

このように見ていくと、どういうタイプの子がそうした行為に走るかを、ある程度予測することはそう不可能なことではない。

おわりに

このように見ていくと、子どもたちにナイフの正しい使い方を教えれば問題は起こらない、といったようなことで解決出来る事ではないということがわかる。心理的な防衛の力をどのようにして育てていくかという課題が浮かび上がってくる。先に指摘した自律能力の不足という課題にもつながっている。中教審が指摘するところの「生きる力」とはまさにそのことではないかと思われる。

最後に、神戸の事件に関して言えば、犯行を犯した少年の心の動きの中に私は数年前に起きたオーム事件と重なる心的世界が存在していることを感じている。それは自分のやったことを儀式化し、意味づけをし、正当化しようとしたという点においてである。一方がそれを集団として行い、他方はそれを個人で行おうとした違いでしかない。つきつめれば、そこには誰も信じていないし、何も信じてはいない世界がある。だから自分勝手に信じるものに傾倒していくことになるのであろうし、人を殺すということも目的正当化されていく。「人を殺しては何故いけないのか」と真顔で問う少年をテレビで見た。その答えを彼もまた自分の枠の中でしか見つけられないとしたら、同じような世界に漂うことになるのかもしれない。そう考えると教育の重みを今更のように考えざるをえない。